

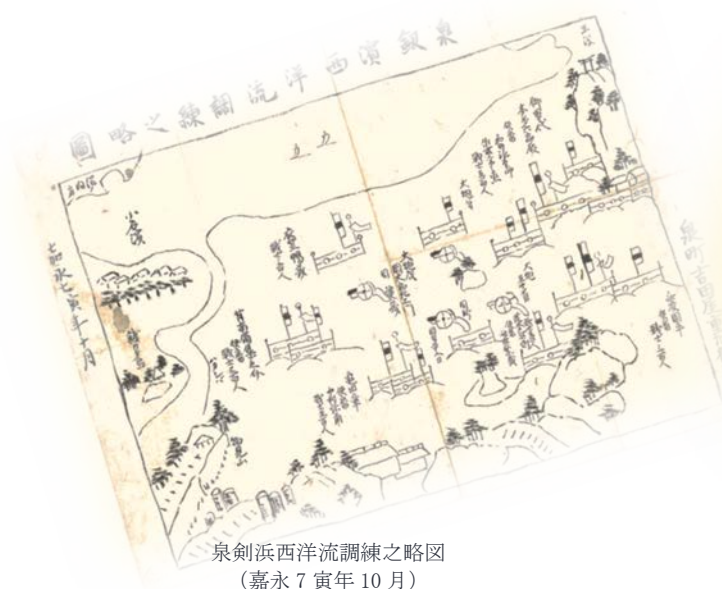
平成 27 年度 企画展示

吉田松陰が来た「いわき」

— 旅日記に記された「いわき」 黒船来航のころ —

目 次

はじめに . . .	1
「いわき」への旅人 東北遊歴の足跡 . . .	2
『浴陸奥温泉記』小宮山楓軒 . . .	3
『東北遊日記』吉田松陰 . . .	5
『諸国廻歴日録』牟田文之助 . . .	7
吉田松陰が来た「いわき」関連年表 . . .	9
浜街道と湯本温泉 . . .	11
「いわき」の海防 . . .	12
石炭の発見 片寄平藏 . . .	13
鯉節・紙漉き . . .	14
参考資料 . . .	15



泉劍浜西洋流調練之略図
(嘉永7寅年10月)



吉田松陰像 - Wikipedia

会場:いわき市立いわき総合図書館
5階 企画展示コーナー

期日:平成27年6月24日(水)~9月27日(日)

時間:10:00~21:00 (日曜・祝日:10:00~18:00)

休館日:毎月最終月曜日・9月8日(火)

主催:いわき市立いわき総合図書館

はじめに

吉田松陰は、東北遊歴中の1852年（嘉永5）1月23日、浜街道を進み、「いわき」に入りました。当時、浜街道は江戸と陸奥^{みちのく}をむすび、参勤交代の大名行列が通り、馬を引く農民や旅人がゆきかい、さまざまな文物、文化が交流した道でした。道筋の城下や宿場、集落には、人びとの暮らしや哀歓などが刻まれています。そして、「いわき」の地には多くの文人墨客^{ぼっかく}が訪れ、旅日記などに「いわき」を記録しました。

松陰が生きた時代（1830–1859）の陸奥「いわき」は、海岸にやってくる異国船を警戒して海岸防備が進められた時期であり、「いわき」の近代化の礎となった石炭地層の発見や、水産業の技術改良、さらには新たな地場製品の開発などが行われた時代でもありました。

今回の展示では、「いわき」を訪れた視点の異なる旅人、小宮山楓軒^{こみやまふうけん}著『浴陸奥温泉記^{よくみちのくおんせんき}』（1827年、水戸藩学者・民政官）、吉田松陰著『東北遊日記^{とうほくゆうにっき}』（1852年、萩藩兵学師範）、牟田文之助^{むたぶんすけ}著『諸国廻歴日録^{しよこくかいれきにちろく}』（1853年、佐賀藩剣術師範）の3人が書き残した「いわき」の様子などから、当時の「いわき」のおもかげをたどり、その関連資料を紹介します。

この展示が、いわき地域への興味を深めていただく端緒となれば幸いです。

いわき市立いわき総合図書館長 夏井芳徳



マシュー・ペリー (Wikipedia)

平成27年度企画展示

吉田松陰が来た「いわき」

旅日記に記された「いわき」黒船来航のころ

平成27年6月24日

編集・発行 いわき市立いわき総合図書館
〒970-8026 いわき市平字田町120
電話 22-5552

「いわき」への旅人

小宮山楓軒 吉田松陰 牟田文之助

東北遊歴の足跡

吉田松陰『東北遊日記』

嘉永4年～5年(1851—1852)
—吉田松陰全集 第9巻—

牟田文之助『諸国廻歴日録』

嘉永6年～安政2年(1853—1855)
—随筆百花苑 第13巻—

小宮山楓軒『浴陸奥温泉記』

文政10年(1827)
—随筆百花苑 第3巻—



いわき 1827年(文政10) 5月16・17・18日

学者で民政家の小宮山楓軒(64歳)は、1827年(文政10)5月14日、水戸を出発して浜街道(旧称水戸路、相馬路、岩城街道)を進んだ。鳴子温泉湯治への旅日記。6月15日帰藩。

1827年(文政10) 5月16日

磐城平領の関田に入る。植田、湯本、「ここにて土人の話を聞くに、言語頗る異なり。」(中略)

「上田(植田)宿、七八十戸あり、昔は百七八十戸ありし所、減じたり。入口に木戸あり、三つ道具(罪人をとらえる突棒・さすまた・袖がらみなど)も建置く、くいちがい土手あり、長屋門白壁見ゆ、是は平の代官松岡久助居る」

「新田、上田より一里二十八町、新田とのみ云えど実は渡辺新田なり。(中略) 耕よく届き、よき村なり。或曰土人の風俗皆質朴に見え、先侯の遺沢あること知られたり。」



勿来の関跡

1827年(文政10) 5月17日

止宿した渡辺新田の門屋治助方を出発、途中の湯本で入浴。

「岩城と云も元湯沸の假借なるべし。これ古えより聞えたる温泉にて湿瘡及諸腫物を治す。故に箕を以て家々に温泉を引、浴槽を設け客を待つ。又随って妓を蓄え客の慰に供するあり、故に其地も繁栄にして人家多し、皆木羽にて葺き、上に尺許の石をひしと載せたり。」

平城下に入り、好学の友・鍋田舎人(三善)を訪問して古文書写などを閲覧し、赤井薬師に登り宿泊。

1827年(文政10) 5月18日

飯野八幡に参詣、平城下は「二三町目富商瓦屋多し。毎月三八の市立よし、今日も市日なれば人馬多く来り、にぎにぎしき城下なり。(中略)魚店多くあり、小名の浜より来るよし」「鎌田村、岩城郡なり、鎌田川あり、一名はなつ井川、板橋百四五十歩。」

鎌田川には、板橋が架けられていたようです。行政官として、民政の経験に裏打ちされた観察の旅日記であり、名所や伝説、古碑や古文書に注意しているが、湯治の効果はあったのか、その点についてはふれられていない。

参考資料 : 『随筆百花苑 第3巻』 中央公論社
『浜街道 勿来関一新地』 福島県教育委員会

小宮山楓軒は1764年(明和元)、彰考館(徳川光圀によって開始された『大日本史』編纂所)に勤める水戸藩士・小宮山昌徳(東湖)の長男として生まれ、名を昌秀、通称造酒之介のち次郎衛門、字子実、号を楓軒と称した。1783年(天明3)19歳の時に父が没して家督をつぎ、彰考館に入り、禄五人扶持を給された。

15、6歳頃、立原翠軒(水戸藩儒学者)に入門し、翠軒が彰考館総裁となると翠軒を助力した。1789年(寛政元)結婚、翌年侍講(藩主に講義する)に選ばれ、1798年(寛政7)には、翠軒の西遊に藤田幽谷とともに同行した。しかし、師・翠軒と藤田幽谷は『大日本史』編集上で意見が対立していった。

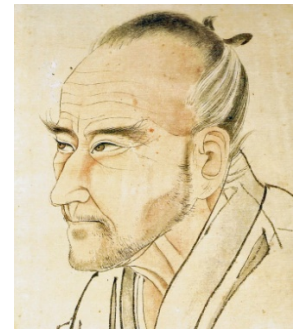
1803年(寛政11)、南郡紅葉組(現茨城県銚田市)の郡奉行となる。楓軒は紅葉役所に赴き、荒廃していた村々を立て直すためにみずから田畑を見回った。また、飢饉のための稗蔵を造り、農民を第一に考えた民政を行い、民政家としてめざましい働きをした。

1820年(文政3)、留守居物頭となり、禄は2百石に進んだ。

1827年(文政10)、鳴子温泉(現宮城県大崎市)へ向かう「浴陸奥温泉記」の旅に出る。

1830年(天保元年)町奉行、1837年(天保8)には側用人の要職に就く。藩主斉昭の信頼も厚く、楓軒の病が重くなると、斉昭は楓軒の病床に見舞いに訪れるほどだったが、1840年(天保11)、3月2日没した。76歳。

楓軒の著作編集物は多く、その範囲も広く、学者行政官としての識見を示している。水戸藩の藤田派の学問とはまた異なる立原派の学問を継承し、その筆録は水戸藩研究の重要な資料となっている。国立国会図書館、静嘉堂文庫、彰考館文庫などに分散所蔵されているが、活字になった文献は少ない。



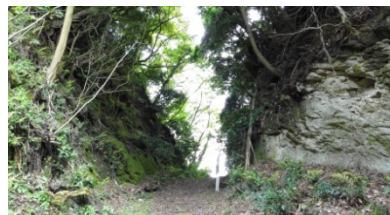
楓軒の師・立原翠軒像
渡辺華山画(Wikipedia)

参考資料：『随筆百花苑 第三巻』 中央公論社
『人づくり風土記8 茨城』 農山漁村文化協会

勿来切通 (なこそきりどおし)



常州関本側からの切通(左上)



奥州勿来側切通(中央)



切通から海岸を望む(右上)

いわき 1852年(嘉永5) 1月23日

1852年(嘉永5)1月23日、長州藩士・吉田松陰、熊本藩士・宮部鼎蔵、南部藩士・江幡五郎の三人が勿来の関を越えた。松陰は「東北遊日記」に次のように記述している。(概略)

1852年(嘉永5) 1月23日

曇。水戸領の常陸から勿来の関を越えた。昔の関は山の上にあるが、今はその下の海岸べりが街道である。関田・荒蜂(安良町)を経て、大島村に至り、鮫川の渡しを船で渡り、上田に泊まった。夜、雨。

この日、弥八(五郎の変名)口に任せて唱えて曰く、「君見ざるや叱咤して風を生ずる楚の項王、一曲の悲歌涙数行、又見ざるや一劍敵を駆す旭將軍(源義仲)、帳中の涙落ちて紛々、英雄元是れ情緒多し、似ざるの凡士は軽んじて留去す。風雨肅々將に日夕ならんとす。来り宿す勿来関下の駅、君と手を分つ他日無からん、言うを休めよ英雄泣癖あるを。」

余(松陰)、乃ちその韻を歩して言う。

「吾れの骨相、侯王に似たるなからんや、且く蝦夷に向かつて啓行と為るを、吾れに斧越六軍を統べる無し。且、世議に向つて破れて紛々、丈夫の功名固より多緒なり、須らく朴すべし西就と東去と、君と追隨して幾晨夕、踏み尽す山亭又水駅、報国の策定に泣く何ぞ妨げん、遠遊豈雲煙の癖となるを。」

1852年(嘉永5) 1月24日

朝晴、既にして雪。海浜を離れて山間に入る。両山の間にながわあり。山田・松川・根岸・斎所の諸村を経て、高貫に宿す。乃ちたにながわの源を發する処にて、昨渡りし所の鮫川は即ち是れなり。是の日、白川・菊田の二郡を経。行程九里。

参考資料：『みちのくいわきふるさと発見』蛭田耕一著 いわき歴史愛好会発行
『吉田松陰 日本思想体系 54』 岩波書店



鮫川(左上)と鮫川橋のたもとに立つ「吉田松陰先生遊歴の地」の碑(右上)

吉田松陰
(Wikimedia Commons)

1830年(天保元) 8月4日、父・長州藩士、杉百合之助常道(家禄26石)、母・滝の次男として長門国萩に生まれる。名は矩方。

山鹿流兵学師範の叔父・吉田大助(家禄57石6斗)の養子となり、吉田家を継ぐ。養父の死後も実家の杉家に同居し、百合之助や叔父玉木文之進から厳格な教育を受ける。藩校明倫館で兵学を教授し、藩主毛利敬親の面前で『武教全書』を講じた。

1849年(嘉永2) 3月、19歳で外寇御手当御内用掛(海防掛)に任ぜられて海岸防備を巡視する。翌年、九州の平戸や長崎に遊歴する。

1851年(嘉永4) 3月、藩主・毛利敬親の参勤に従い江戸に游学、安積良斎・古賀茶溪・山鹿素水・佐久間象山らに学んだ。同年12月、藩の許可を得ず、友人宮部鼎蔵らと東北行を敢行する。水戸、いわき、会津、新潟、佐渡から東北をめぐる。翌1852年(嘉永5) 4月、江戸に戻ると、萩へ帰国・自宅謹慎となり、脱藩の罪により御家人召放、父百合之助の育となる。

1853年(嘉永6) 1月、10年間の諸国游学が許可され再度江戸に游学中、ペリーの浦賀来航に遭遇する。9月、海外視察のために密航を企て、長崎に向かうが果たせなかった。

1854年(嘉永7) 1月、ペリーが和親条約締結のため再航すると、3月27日夜、金子重之助と下田に停泊中の米艦のポーハタン号に上る。外国への密航を懇請したが容れられず、翌日自首し、江戸の獄舎に投ぜられた。同年9月、連坐して捕縛された佐久間象山ともども自藩幽閉となり、松陰は萩の野山獄に収容された。獄内で『孟子』を講義し、それが機縁となり松陰の主著『講猛余話』が生まれた。

1855年(安政2) 12月、病氣保養を理由に実家杉家に預けられると、松下村塾を主宰し、約2年間、高杉晋作・久坂玄瑞・前原一誠・伊藤博文などを教導した。松下村塾は、松陰自身の実学指向により、当時の世界情勢やわが国の実情について考究する実践的な思想鍛錬の場となり、倒幕、維新への流れはその門下生たちに拠るところが大きかった。

1858年(安政5)、日米修好通商条約の調印問題で、松陰は幕府の無勅調印を厳しく批判した。長州藩は、松陰の過激な言動に対し、再び野山獄に収容した。

1859年(安政6) 5月、幕府から松陰東送の命が下った。6月江戸着、7月9日から訊問が開始された。幕府の尋問は、安政の大獄で捕縛した梅田雲浜との関係を問うもので、それ自体は処罰の対象となるものではなかったが、松陰はペリー来航以来の幕府の政策を批判し、幕府が知らなかった老中・間部詮勝の要撃策や大原重徳の西下策までを自供したために「死罪」の判決が下った。同年10月27日処刑された。29歳。

参考資料：『日本近世人名辞典』 吉川弘文館

佐賀藩剣術師範の牟田文之助は、1854年(嘉永7)ペリーの再来航の後に北行した。5月9日、信州上田藩士・石川大五郎とともに水戸城下を出立し、棚倉からいわきへ向かった。

1854年(嘉永7) 5月14日(晴天)

棚倉城下から途中の道は山中のため人足を雇うが、この辺りの人の言葉は少しも判らず、あたかも唐人の咄のようだ。うっそうとして人気もない道は話に聞く木曾街道に劣らない。湯本に着き、山形屋庄七方に宿をとる。湯本温泉は人家が1千軒ほど、茶屋・料理屋・遊女なども多く、他藩の者がしばしば出向いてくるという。高値の所で、酒は1升150文、米は1升100文、宿賃は250文。特に宿賃は高値だった。



湯本温泉 山形屋跡

1854年(嘉永7) 5月15日(晴天)

昼過ぎまで湯本の温泉に入り平に出立、平城下の式丁目、有馬屋佐藤次方へ止宿。

1854年(嘉永7) 5月16日(晴天)

平藩城下の「松本道場」で立ち合いをした。道場主の松本権太夫は平藩の師範で、その屋敷は城をかこむ堀の外にあり、敷地は広大だった。門を入れて右手に道場があり、松本の門弟およそ20人と立ち合った。道場は4間に7間(約7.3×12.7メートル)の板敷きで立派だが、門弟の実力はお粗末で、「出きる人はひとりもない」。一方、平城下はにぎやかで、海に近いので魚の種類が多い。

1854年(嘉永7) 5月17日(晴天)

平藩城下を出立し神谷村へ入る。神谷村は笠間藩(茨城県笠間市)の飛び地で、陣屋には道場があり、修行人がしばしば立ち寄ると聞き、陣屋に向かう途中、青木榮左衛門が「陣屋の道場でお手合わせを願いたい」と声をかけてきた。その夜は紹介された旅籠屋に宿泊した。

1854年(嘉永7) 5月18日(晴天)

陣屋の道場で11人ほどと立ち合った。道場は2間に5間(約3.6×9.1メートル)の板張りで、郡奉行二人が見分していた。ここは3万石の陣屋で、詰め人数は40人くらいいるという。その夜、近所の博労の家から火が出た。陣屋では半鐘を鳴らし、役人たちは火事装束で繰り出していき大騒ぎだった。文之助と石川も火事見物に出かけた。翌19日、神谷村を出立して富岡へ。

参考資料：『随筆百花苑 第13巻 諸国廻歴日録』牟田文之助著 中央公論社
永井義男著『剣術修行の旅日記』朝日新聞出版
『湯本川—その自然と歴史—』湯本川を愛する市民ネットワーク

牟田文之助は、1830年(天保元)11月24日、佐賀藩^{てつじん}鉄人流剣術師範、吉村市郎右衛門惟章の次男に生まれる。名は高惇^{たかあつ}。牟田家の養子となり1836年(天保7)家督(切米20石)を継ぐ。剣を実父に学び同藩の鉄人流師範内田庄右衛門^{よしおき}良興にも師事し、1852年(嘉永5)実父から「二刀流秘伝の巻」を与えられ、内田からは鉄人流のすべてを伝授された。

当時、佐賀藩では剣術、槍術、文学の修行のため、藩士を選抜して修業に出すことが行われ、文之助も1853年(嘉永6)9月から1855年(安政2)9月までの2年間、関東・東北諸国^{めぐ}を廻り、各地で多くの著名^{けんかく}剣客やその門人たちと試合^{けいこ}や稽古をした。その間に『諸国廻歴日録』^{しよこくかいいきにちろく}筆記した。

『諸国廻歴日録』では、1853年(嘉永6)10月18日、長州萩城下で「文学方役人小田村伊之助^{おだむらいのすけ}と申人、諸所案内に参り候なり」とある。また、修行中に2度、約1年間、江戸に滞在したが、ペリー艦隊の来航により佐賀藩江戸屋敷の警護を命じられた。また、その間に、当時三大道場といわれた斎藤弥九郎^{やくろう}・千葉周作^{もものいしゆんぞう}・桃井春蔵の道場を訪れている。

帰藩の後、1864年(元治元)には、幕府の長州征討に佐賀藩として出陣し、1868年(慶応4)の戊辰戦争には会津若松城攻めに小荷駄方として従軍した。

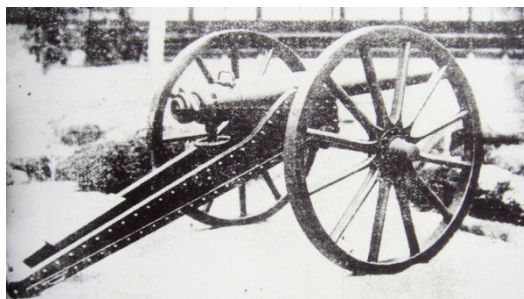
1873年(明治7)の「佐賀の乱」では、愛国舎^{ぎよぶ}禦侮大隊八番小队司令として江藤新平^{えとうしんぺい}軍に従ったが降伏し、除族の上、懲役3年の刑を京都において服役する。1875年(明治9)4月、病により郷里に帰ることを許されたが、内乱^{たいしや}に関する大赦をうけたのは、1889年(明治22)5月だった。

翌年1890年(明治23)12月8日病没。60歳。



佐賀藩主・鍋島直正(閑叟)
(Wikipedia)

参考資料：『全国諸藩 剣豪人名事典』 角川学芸出版
『随筆百花苑 第13巻 諸国廻歴日録』 牟田文之助著 中央公論社



戊辰戦争で活躍したとされる佐賀藩製の
アームストロング砲 (Wikipedia)



『皇国一新見聞誌 佐賀の事件』佐賀の乱の浮世絵
(Wikipedia)

松陰が来た「いわき」関連年表

1764年(明和元)～1852年(嘉永5)

西暦	年号	月日	事 項
1764	明和元		小宮山楓軒(水戸藩、小宮山東湖長男)生まれる。
1792	寛政4		寺西重次郎、陸奥代官として小名浜48,000石・塙6万石支配して、塙に陣屋を構える1814年(文化11)、桑折陣屋付き3万石加増され、桑折陣屋へ移る。
1799	11		小宮山楓軒、水戸藩南郡紅葉組(紅葉村)の郡奉行となる。
1813	文化10	2.15	片寄平蔵、現在の四倉町大森に生まれる。
1819	文政2	2.10 11.25	長州萩藩、毛利敬親生まれる。 磐城平藩、安藤信正生まれる。
1820	3		小宮山楓軒、留守居物頭(禄200石)となる。
1824	7	5.29	磐城沖にイギリス船が現われ、大津浜(北茨城市)へ上陸。
1826	9		鍋田晶山(三善)磐城志を著す。
1827	10	5.14 12.7	小宮山楓軒「浴陸奥温泉記」旅立つ(5.16～18、いわき) 西郷隆盛(薩摩藩)生まれる。
1830	天保元	8.4 8.10 11.24	吉田松陰(長州藩、杉百合之助次男)生まれる。 大久保利通(薩摩藩)生まれる。 牟田文之助(佐賀藩、吉村市郎右衛門次男)生まれる。 小宮山楓軒、町奉行となる。
1835	6		叔父・吉田大介死亡。松陰、吉田家の家督を継ぐ。
1836	7	11.15	いわき、大冷害、餓死者多数(天保の大飢饉)久保木貞右衛門、窮民を救う。 泉藩、本多忠徳が藩主となる。
1837	8		小宮山楓軒、側用人となる。
1839	10	8.20	高杉晋作生まれる。 松陰、長州藩校「明倫館」で山鹿流兵学を教授する。
1840	11	3.2 5月 6.28	小宮山楓軒死去、76歳。 久坂玄瑞生まれる。 清国とイギリス、アヘン戦争。 松陰、藩主毛利敬親の前で「武教全書」を講義する。
1841	12	9.2	天保の改革。 伊藤博文生まれる。
1842	13		幕府、異国船への薪水給与令を出す。 いわき、年貢の減少を求め下永井村与三郎ら籠訴。 松陰の叔父・玉木文之進、自宅に私塾「松下村塾」を開く。
1843	14		湯長谷藩校「致道館」設立。
1847	弘化4	6月 8.2	磐城七浜大シケで船舶被害。 平藩、安藤信正が藩主となる。
1848	嘉永元		いわき、このころ房州から土佐切り(鯉節)伝わる。
1849	2	3月 6月	松陰、外寇御手当御内用掛を任ぜられる。 須佐・大津・赤間関などの海岸防備を巡視する。
1850	3	8月	いわき小久村、多古藩領となる。 松陰、九州に遊学、葉山佐内や宮部鼎蔵らを訪ね、見聞を広める。
1851	4	3月 12月	松陰、藩主の参勤交代に従い江戸遊学。山鹿素水、安積良斎、佐久間象山らに学ぶ。 松陰、藩の許可を得ず宮部鼎蔵らと「東北遊日記」旅立ち、脱藩となる。 いわき、室桜関が藩儒(藩主に仕える儒学者)となる。
1852	5	1.23 4月 12月	松陰、陸奥へ入る。上田(植田)宿泊。 泉藩、藩校「汲深館」を創立、藩主忠徳の書齋名から命名。 松陰、東北の旅から江戸へ戻る。藩から帰国、自宅謹慎を命じられる。 松陰、脱藩の罪により実父・百合之助の預かりとなる。

1853年(嘉永6)～1890年(明治23)

西暦	年号	月日	事 項
1853	嘉永6	1月 6.3 6.22 7.18 9月	松陰、長州藩から10年間の諸国遊学許可、江戸に出る。 アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー、軍艦4隻を率いて浦賀来航。 12代将軍、徳川家慶、死去。 ロシア使節プチャーチン、軍艦4隻率いて長崎に来航し国書受理を要求する。 松陰、ロシア軍艦への密航を企て長崎に向かうが果たせず。 泉藩主・本多忠徳、武蔵・下総・安房の海岸巡見を命ぜられる。
1854	安政元	1.16 3.3 3.27 4.14 5.14 10.24 12.21	ペリー艦隊浦賀に再来航(江戸滞在中の松陰、文之助は浦賀へ見物)、翌月横浜に上陸。 日米和親条約締結。 松陰、ポーハタン号に乗り込み密航を請願するが拒否される。江戸の獄に収容される。 牟田文之助、江戸から東国へ剣術修行の旅へ出る。 文之助、下松川(古殿町)～いわき5.19～富岡へ。 松陰、江戸から護送され萩・野山獄に入獄。 日露和親条約調印、択捉・ウルフ間を国境とし、樺太は両国雑居とする。
1855	2	9.17 12.15 12.23	牟田文之助、佐賀城下に着、剣術修行の旅を終える。 松陰、病気療養を理由に、杉家へ帰る。 幕府、日蘭和親条約調印。
1856	3	12.1	片寄平蔵、石炭を発見する。 梅田雲浜、松下村塾を訪れる。
1857	4	11.5 12月	片寄平蔵、明石屋とともに白水村に石炭開鉱。 杉家内の小屋に講義室を設け、松陰主宰の「松下村塾」が発足する。 久坂玄瑞、松陰の妹・文と婚姻、杉家に同居する。 高杉晋作、伊藤博文、品川弥二郎らが松下村塾に入塾。
1858	5	4.12 4.23 6.19 7月 9.3 9.7 12.5	松陰、日米修好通商条約に反対する「村塾策問一道」を配る。 彦根藩主・井伊直弼が大老に就任する。 幕府、日米修好通商条約に無勅許調印する。 幕府、松陰に松下村塾の正式開塾を許可。 幕府、日仏修好通商条約に調印。 小浜藩主・梅田雲浜が京都で捕縛、以後尊攘派志士が続々と捕縛される。 長州藩、吉田松陰を過激思想として野山獄へ再投獄。
1859	6	5.26 7.9 9月 10.27	松陰、江戸に召喚される。 松陰、評定所で尋問、伝馬町牢に入る。 幕府、橋本佐内、頼三樹三郎を死罪に処す。梅田雲浜、獄死する。 松陰、死罪に処せられる。29歳。
1860	万延元	1.19 3.3 6.12 8.3 11.1	幕府軍艦「咸臨丸」が品川からアメリカへ出航する。 大老・井伊直弼、登城中に桜田門外で水戸藩士らの襲撃(桜田門外の変) 泉藩主・本多忠徳、若年寄在任中に没、42歳。 片寄平蔵、江戸にて没する。47歳。 平藩主・安藤信正、老中となり外国事務を担当、内政では公武合体策を推進。
1861	文久元	4.12	ロシア軍艦「ポサドニック号」が基地設置のため対馬へ来航、対馬藩兵と衝突。
1862	2	1.15	老中・安藤信正、坂下門外で襲撃される(坂下門外の変)
1864	元治元	6.5 7.8	新選組、池田屋襲撃、宮部鼎蔵(松陰の東北同行者)、吉田稔磨らを惨殺(池田屋事件) 牟田文之助、幕府の長州征討に佐賀藩士として出陣、長州の恭順により戦闘を回避。
1867	3	4.14 10.15	高杉晋作病死(27歳) 大政奉還。
1868	4	閏4.11	戊辰戦争で牟田文之助、4.25横浜着、進軍して会津若松城攻撃に小荷駄方で参加。 6.28泉館・6.29湯長谷館西軍占領、7.13平城落城。
1871	明治4	3.28 10.8	毛利敬親、死去52歳。 安藤信正、死去51歳。
1874	7		牟田文之助、「佐賀の乱」で反乱軍、八番小隊司令となるが、3.15降伏し懲役3年の有罪。
1876	9		牟田文之助、「重病ニツキ」釈放。
1889	22		牟田文之助、大赦を受け内乱の罪を取り消される。
1890	23	12.8	牟田文之助、病没60歳。

※年齢は満年齢で算出しています。

参考資料：『松下村塾と幕末動乱』 双葉社
『新しいいわきの歴史』 いわき地域学会

浜街道と湯本温泉

「いわき」で最も多く利用されてきた^{はまかいどう}浜街道は、水戸街道の延長で、北に向かう街道だった。この道には古来から決められた名称がなく、「いわき」では南に向けて水戸道・水戸街道、北向きは相馬街道と称していた。磐城街(海)道という名は他所の人たちが呼称していた。

街道筋の宿場で、参勤交代の藩主が泊まる本陣は、北茨城神岡、植田、湯本、四ッ倉にあったが平にはなかった。江戸時代の『大日本細見道中記』には「関田・入や(1里舟渡し、鮫川)―植田・松や(2里28丁)―渡辺新田・浜や(28丁)―湯本・久保や(2里半)―磐城平・二町目有馬屋・三町目十一屋(2里半鎌田川川渡しあり)―四ッ倉・つるや―久之浜・橋本屋」、宿場と旅籠屋名が載る。

大きな川には橋掛けが禁止され、植田の^{さめ}鮫川と^{かまた}鎌田(夏井)川は渡し舟で往来した。舟の渡し賃は、植田は30文、鎌田川10文。鮫川を舟で渡ると植田宿に入る。本町裏手に平藩の陣屋があり、仙台の伊達氏・中村の相馬氏が泊った本陣も構え、菊多郡の中心的な宿場であった。

^{しんでん}新田(渡辺新田)宿は、現在もその家並みに面影が少し残されている。

^{ゆもと}湯本は温泉宿として古くから有名で、著名な名士たちが多く訪れた湯で幕府領であった。本陣があり、伊達、相馬中村藩などが往復に宿泊した。延享3年(1746)には家数172軒、馬64頭あったという。一方、^{きょうらくち}享楽地として栄えた温泉郷でもあり、旅日記にもそのにぎやかさが描かれた。また、1856年(安政3)には、越後の新発田からの酒杜氏政次(39才)と湯本の遊女小梅(17才)の^{ゆもとしんじゅう}心中事件を描いた「かわら版湯本心中」がでた。

浜街道を平城下に入ると^{ながはし}長橋を渡る。大根川(今の^{なにか}新川)に掛かる橋は、平安時代に岩城氏に嫁いだ^{とくひめ}徳姫が、大雨後の村民が通行に^{なんぎ}難儀するのを見て、長さ130間の橋をかけて救ったという伝説がある。



街道の名残を残す松の木
(四倉町)



湯本温泉湧出地跡碑と御齋所街道の碑
(常磐湯本町)

参考資料：『図説いわきの歴史』郷土出版社
『陸前浜街道いわきの宿場をゆく』蛭田耕一著 新研社

「いわき」の海防

18世紀後半からたびたび西欧諸国船の日本接近が見られ、幕府は1791年(寛政3)異国船渡来の際に、臨検・抑留・攻撃などに対する制度を設けた。1793年(寛政5)幕府が発した沿海諸藩の異国船への厳重警戒は、海をもつ泉藩へも達せられた。

危機感^{ほんただだしげ}は年々高まり、1807年(文化4)、泉藩主本多忠誠は浜方防衛のため江戸在住の家来60人余^{ながえ}を長柄^{ぐそく}、鉄砲、具足などを持たせて帰藩させた。同10月には幕府から海岸視察が訪れ、いわきの沿海村々を検分した。翌年、船が着岸可能な場所は手抜きなどしないようになどとの「大目付触」^{おおめつけふれ}が渡された。

1824年(文政7)5月29日、平潟^{ひらかた}(茨城県北茨城市)沖に唐船が見え、小浜村^{おぼま}の唐船見番所(異国船監視)へ通報、泉藩の家臣たちは海防隊を編成して警固にあたった。平藩も関田^{せきた}へ出張警戒にあたった。異国船の大津上陸、いわゆるイギリス捕鯨船員の大津浜上陸であった。

翌1825年(文政8)、幕府は異国船打払令^{むにねん}(無二念打払令)を諸国に命じたが、1842年(天保13)には、この令を撤回して異国船薪水令^{てっかい}を出した。1836年(天保7)藩主となった忠徳^{ただのり}は、1852年(嘉永5)に藩校を創立し、忠徳の書齋の名から「汲深館」^{きゅうしんかん}と命名した。学頭衣笠真二郎^{きぬがさ}を中心に、家臣の子弟のほか領民の子弟にも文武の研修をつませた。



泉劍浜西洋流調練之図
(安政7寅年10月)

海岸防備のため泉藩は独自に警固策をたて、唐船見番所を設けたり、軍事調練などをした。

1853年(嘉永6)6月、ペリーの来航から鎖国令は解かれ、忠徳は武蔵・下総・安房の海岸巡険を命ぜられた。忠徳は海防に関心を持ち、みずから江川太郎左衛門に砲術を学び、家臣にも江戸の講武所^{こうぶしょ}や伊豆の葦山塾^{いらやまじゅく}で砲術を習練させるほどだった。

1860年(万延元)6月、若年寄在任中に没した。

参考資料：『いわき市史 第2巻 近世』いわき市
『新しいいわきの歴史』いわき地方史研究会

石炭の発見と採掘 かたよせへいぞう 片寄平蔵



片寄平蔵像
(いわき市石炭化石館)

幕末のアメリカ船の入港は大きな波紋をおこした。その第一は開国であるが、「いわき」にもその影響を与えた。1856年(安政3)、片寄平蔵による石炭の発見である。石炭の発見には、江戸の日本橋四日市町の海産物商兼材木商で、紀州徳川家の御用達商人でもある明石屋治右衛門あかしやじえもんが大きくかかわっていた。明石屋は磐城七浜いさばの五十集いさば(水産加工商)衆とは宝暦年間(1751-64)には取引を始め、鰹節・塩鰹などの海産物を買付けしていた。平蔵も材木や海産物の取引で、明石屋とは深い関係があった。

当時「クノウカウ」といわれていた石炭を発見したのは平蔵だったが、採掘したのは明石屋であった。平蔵は明石屋のいわきでの代理者だった。石炭が発見された白水村しらみずむらは湯長谷藩の領内だったため、笠間藩の平蔵は湯長谷藩の商人加納作次郎かのうの紹介で採掘を願い出た。

1857年(安政4)に発掘を始め、石炭は俵たわらにつめて、2俵(1俵60kg)ずつ馬の背につけ、平藩領中之作港に運び、江戸へ船で輸送した。横浜開港により石炭の需要が増えることを見越して、明石屋は横浜に出店し、平蔵を援助して「明石屋平蔵」の名義で横浜本町五丁目かとおのしに石炭・コールドールや、地元の上遠野紙、中国向けの干椎茸ほしいたけを商う店を出して繁昌した。

1860年(万延元)3月、平蔵は笠間藩領内に年貢米の積み出し港として、仁井田浦の築港工事を行なった。同年8月3日江戸で没した。

参考資料：『図説いわきの歴史』 郷土出版社



磐城炭業祖先加納作平翁碑



本島炭鉱神社参道跡



石炭発見の地(内郷弥勒沢)看板



露出している石炭層

鯉節と紙漉き

鯉節

「いわき」を代表する産業は、江戸時代以前から漁村のかつおぶし鯉節製造と農村におけるかみす紙漉きであった。鯉は毎年6月ごろ、黒潮にのって「いわき」の沿岸近くまで押しよせてきて、漁民はこの鯉漁で1年間の生計をたてていた。

江名・小名浜・豊間・薄磯・沼之内・四倉・久之浜などに水揚げされた鯉は、地元はもとより、中通りの本宮・郡山・須賀川の宿場町に翌朝までには移送され、販売された。鯉は塩鯉と鯉節に加工され、大部分は船で江戸の町に出荷された。天保の飢饉(1836年)の際、江名・豊間の浜や湯長谷藩の経済復興が順調にいったのは、鯉節問屋伊勢屋長兵衛の資金があったからだった。

いわきぶし磐城節は、土佐節や薩摩節の本場物に対して技術的に相当な差があり、江戸市場では低い価格で取引されていた。嘉永年間(1848~1854年)にはこの技術改良のため、房州の鯉節職人による土佐流の技術を取り入れ、「磐城土佐切り」と称して鯉節の販路の拡大をはかった。



諏訪神社(四倉)
「改良鯉節之碑」と「鯉のぼり」

紙漉き

いわき岩城紙(磐城紙)は、おもに上遠野郷やしらみず白水・こうや高野村で農家の副業として漉かれていた。天明年間(1780年代)ころからは、江戸の豪商、てんめい村田七右衛門の命によりしちえもん村田忠兵衛が上遠野に永住して、紙・馬・木材などを買い付けして江戸に送っていた。七右衛門は江戸に紙問屋株仲間を組織して「常陸紙」を大量に扱った商人であった。これら江戸商人によって売りさばかれた岩城紙はだいふくちよう大福帳などに使用された。

参考資料：『新しいいわきの歴史』いわき地域学会



黒船来航 (Wikipedia)



合衆国水師提督口上書(嘉永6年6月8日) 左よりヘンリー・アダムス副使(艦長)、ペリー水師提督、アナン軍使(司令官) (Wikipedia)

△▽△▽△ 関連(参考)資料 △▽△▽△

- ◆ 『随筆百花苑 第三巻』(『浴陸奥温泉記』 小宮山楓軒) 中央公論社 1980年
(K/081/ズ-3)
- ◆ 『随筆百花苑 第十三巻』(『諸国廻歴日録』 牟田高惇) 中央公論社 1979年
(K/081/ズ-13)
- ◆ 『日本思想大系 54 吉田松陰』 岩波書店 1978年 (K/081/ニ-54)
- ◆ 『浜街道 勿来関一新地』 福島県教育委員会編集・発行 1985年 (K/210.1-0/レ)
- ◆ 『新しいいわきの歴史』 いわき地域学曾出版部 1992年 (K/210.1-1/ア)
- ◆ 『いわき市史 第2巻 近世』 いわき市史編さん委員会 いわき市 1975年 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわき市史 第9巻 近世資料』 いわき市史編さん委員会 いわき市 1972年
(K/210.1-1/イ)
- ◆ 『図説 いわきの歴史』 里見庫男監修 郷土出版社 1999年 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわき市 勿来地区地域史 1』 いわき市勿来地区地域史編さん委員会発行
2012年 (K/210.1-1/イ-1)
- ◆ 『みちのくいわき ふるさと発見』 蛭田耕一著 いわき歴史愛好会 1988年 (K/210.1-1/ヒ)
- ◆ 『陸前浜街道 いわきの宿場をゆく』 蛭田耕一著 新研社 1985年 (K/210.5-1/ヒ)
- ◆ 『松下村塾と幕末動乱』 双葉社 2014年 (210.5/シ)
- ◆ 『図説北茨城市史』 北茨城市史編さん委員会 北茨城市 1983年 (K/213.1/ズ)
- ◆ 『嘉永五年東北一吉田松陰『東北遊日記』抄』 織田久著 無明舎出版 2001年
(K/289/ヨシ)
- ◆ 『東遊雑記 奥羽・松前巡見私記』 古川古松軒著 平凡社 2003年 (K/291/フ)
- ◆ 『東奥紀行一長久保赤水の旅日記 上・下』 長久保片雲編著 筑波書林 1991年
(K/291.2/ナ)
- ◆ 『湯本川一その自然と歴史一』 湯本川一その自然と歴史一編集委員会
湯本川を愛する市民ネットワーク 2003年 (K/517/ユ)
- ◆ 『剣術修行の旅日記 佐賀藩・葉隠武士の「諸国廻歴日録」を読む』
永井義男著 朝日新聞出版 2013年 (K/789/ナ)
- ◆ 『江戸「東北旅日記」案内』 伊藤孝博著 無明舎出版 2006年 (K/915.5/イ)

